

3. 大宰府の歴史

(1) 古代都市の成立経緯

大宰府の初現については諸説あるが、筑紫大宰の名が史上に現れるのは推古朝からである。その後、西暦 663 年の白村江敗戦を契機に築かれた水城・大野城・基肄城等で構成される施設を拠点とし（664–665 年以降、当時は筑紫大宰）、官司機構の整備が進められ、701 年の大宝律令によって律令官司・大宰府が整ったとされる。

律令制下の大宰府は、西海道九国三嶋の管轄、また軍事・外交といった対外機能を担う特別な官司で、朝廷さながらの組織と機能を備えていた。その長官である大宰帥は、天智朝以降（筑紫大宰府時代）には皇族（王）や重臣の赴任が相次ぎ、これをある意味継承するように、大宝以降は従三位・中納言クラスという高位者（公卿）が赴任した。天皇不在ながらも大宰府は「遠の朝廷」（『万葉集』巻 3-304）そのものであったといえよう。

これと関連して、大宰府には他の一般官司にない大きな特徴がある。それは官司整備とともに、当初から本格的な都市整備が推し進められたことである。以下に述べるように、都市の基本的な構成は日本古代宮都と一致し、宮都造営契機とも連動する特徴をもつ。

大宰府の都市整備は、藤原京造営期に条坊が設けられたことがその始まりで、当時の整地層・条坊側溝・条坊内区画溝などが検出されている。『日本書紀』持統天皇 3 年（689）9 月庚辰朔乙丑条の筑紫新城記事がこれに対応するとみられ、そのきっかけは 6 年前のいわゆる複都制の詔に端を発する可能性もある（『日本書紀』天武天皇 12 年（683）12 月庚午条）。その造営には当時筑紫大宰帥だった粟田真人が関わっていたとみられる（Ⅰ期大宰府）。

粟田真人はその後、大宝 2–4 年（702–704）遣唐執節使として渡唐するが、彼らが唐から持ち帰った情報によって、律令体制改革（慶雲の改革）、そして北闕型都城への転換を図っての平城遷都が実行されたと評価されている。彼は中納言として改革の中心にいたが、和銅元年（708）平城遷都詔が出た直後、中納言兼任のまま再び大宰帥として赴任する。706 年から平城京造営の「百姓身役」とともに大宰府再整備の「筑紫の役」が始まっている中（『類聚三代格』慶雲 3 年（706）2 月 16 日格）、粟田真人の再赴任によって、観世音寺造営督促の詔（『続日本紀』和銅 2 年（709）2 月戊子条）、御笠郡大領の「益城連」賜姓（同年 6 月乙巳条）と、事業が本格化したことが窺える。霊龜元年（715）5 月、次の大宰帥に平城遷都詔直後から造平城京司長官として活躍した多治比池守が任命された。池守の赴任後、大宰府整備が完了したとみられ、彼は養老元年（717）に善行を褒賞され、また翌 2 年（718）は「筑紫の役」の終了に伴い西海道の庸の全免が諸国並みに解消されている。こうして完成した古代都市・大宰府は、平城京に似た姿だったことが考古学研究で明らかとなっている（Ⅱ期大宰府）。

このように、粟田真人・多治比池守らの指揮の下、唐長安城に代表される東アジアの都城制に基づいて、宮都・平城京と、遠の朝廷・大宰府が完成したのである。

(2) 古代都市の姿と広域ネットワーク

Ⅱ期大宰府の都市は、天智朝築造の水城・大野城・基肄城を利用し、かつ天武・持統朝に備えられたⅠ期の条坊区画を利用して、平城京型（北闕型）に姿を変えたものであった。

政庁は、大野城跡が置かれた四王寺山南麓におかれ、その建物配置は、宮殿に類する朝堂院形式を採用した。正殿は瓦葺礎石建ちの四面庇建物で、前には宮都大極殿前にみられる龍尾壇と目される石敷きの高まりがある。その南は庭となり、東西両脇に各2棟づつ瓦葺礎石建ち二面庇の脇殿を設けた。これらを回廊が囲み、南中央には門（中門）を設けている。回廊の北側は築地塀で囲われ、正殿の背後に後殿を設けた。回廊の南側も築地塀で囲われ、南中央に南門が設けられた。南門の前は比較的大きな段差となり、その南は空間（広場）となっている。広場の中央西脇には4×10間の掘立柱四面庇南北棟（SB2300）があり、これを朝集殿とする意見もあるが定かではない。広場の東西には多くの建物が建ち、付札木簡等が出土することから、一帯は官衙域に比定されている。

政庁の東には漏刻台が置かれたとの伝承がある月山（辰山）があり、周辺に官衙と目される建物が点在する。さらに東は府学校（大宰府学校院）が設けられ、府の大寺・観世音寺と境を接している。政庁の西は蔵司と呼ばれ、丘陵上には政庁正殿より大きな巨大礎石建物跡の存在が知られている。近年の調査で、これは蔵跡ではなく南北二面庇の正殿的な建物跡と判明した。周囲から鉄鏃・武器といった大量の鉄製品が採集されているが、建物や地下遺構との関係を示すものはなくその性格については謎が多い。この西側は金属工房跡・瓦窯跡が点在しており、匠司と推定されている。なお、南門前広場の南の御笠川底から巨大な礎石が発見され、平城京朱雀門に相当する門があったと推定される（以下、朱雀門）。このことから、これより北側を政庁・官衙域とみて間違いないだろう。このエリアを北に配すように、周辺にはグリッドプランによる条坊都市が広がっている。

条坊は、考古資料と平安時代中～後期の文献史料の一致から、南北22条、東側（左郭）12坊、西側（右郭）8坊と復元される。一区画（史料では坪と呼称）は、設計線に基づいた90m四方で区画されており、よって条坊範囲は東西1800m、南北1980mほどとなる。条坊道路は路面と側溝で構成され、幅5～8mを占有する。坪を囲う築地などは見つかっていないが、中は建物跡・井戸跡・土坑・小穴・整地が密度高く展開し、土器・瓦・金属製品・木製品等とともに出土する多種多量の国内外の陶磁器が、対外関係を司った大宰府のまちの特徴を物語っている。そして、条坊の外側には条里地割が広がっている。

朱雀大路（郭心南北大路）は、朱雀門前から南に延びている。これは政庁に向かう正式な道であり、平城京朱雀大路の1/2幅という規模という、当時国内2位の広さをほこる大道だった。朱雀大路沿いには、平安時代の従三位ないし四位参議以上が着用した白玉帯の出土が集中しており、大宰権帥として左降した菅原道真（845-903）が謫居した府の南館跡と伝えられる榎社や、大宰大弐・藤原高遠（949-1013）が和歌を詠んだ幸橋伝承地、また外国使節を安置供給した客館跡（後述）が並んでいる。朱雀大路の南端の羅城門は未発見だが、平城京同様に設置されたことは十分推測される。道はここからさらに南へ延び、大宰帥で万葉歌人の大伴旅人（665-731）の和歌が伝えられる二日市温泉（次田の湯）に至り、さらに南へ向かって基山登山道から基肄城東北門に至り、城内を南門（水門）へと進むとみられる。これに沿った現道のほか、「湯大道」（筑紫野市湯町）、「車道」（基肄城内）という小字も残っている。こうした南北道は平城京と下ツ道との関係に一致するもので、中国の都城にもみられるものである。

大宰府に至る官道も整備された。外国使節は博多湾岸に設けられた筑紫館（鴻臚館）から延びる官道を通して、水城西門・条坊南西端・羅城門を經由し朱雀大路に入ったと想定されている（水城西門ルート）。都から陸路で大宰府に向かう場合、「大宰府道」と呼ばれた山陽道を通ってきた。官人赴任の際には水城で境迎儀式が行われており（『大式高遠集』『小右記』）、水城東門－苜蓿関－政庁南門前の条坊路（四条路）を經由するのが正規のコースとみられるが（水城東門ルート）、田河道（豊前方面）から米ノ山峠を越え、蘆城駅家（『万葉集』巻 4-568、8-1530、筑紫野市阿志岐）を經由して東から政庁に至る道も推定されている。

このほか南東および南から大宰府へ入る道もある。南からの道は、筑後守葛井連大成の和歌にみられる「城山道」で（『万葉集』巻 4-576）、前述の基肄城内を通過する道、あるいは東側の峠道との想定がある。南東からの道は、岡田地区遺跡群（筑紫野市岡田）で見つかった官道から長丘駅（『延喜式』、筑紫野市永岡が比定地）を經由し、大宰府へ入ったと想定されている。

これらの道によって大宰府には多くの人・物が集まった。都のように市が設けられたことも推定されており、鷲田川の南には「市ノ上」などの小字も残る。これが「人物殷繁、天下之一都会」大宰府の姿である（『続日本紀』神護景雲3年（769）10月甲辰条）。



古代大宰府周辺の広域ネットワーク

(3)古代都市の意義と客館跡の発見

以上、古代都市大宰府を概観したが、その造営は藤原京・平城京といった宮都造営と密接に関連しつつ、都城的な整備が施されたことがうかがえる（Ⅰ・Ⅱ期）。このことは、大宰府が役目を遂行するため、こうした都城の機能を備える必要がその当初（7世紀末）からあったということだろう。それは都城のもつ礼制機能と関わっていたとみられる。

当時の儀礼空間においては、主従主客を示す方位や中軸線が重要だった。中国ではじまったこうした礼制は東アジアに通有するものとなり、儀礼の場では互いにそのことを認知した上で配列し挙動した。そうすると内政外交両面で儀礼・賓礼を行う各国宮都においては、施設内だけでなく都市全体がそうした儀礼の場として機能する必要があり、中国系都城を国際標準として都城造営が行われたとみられる。

平城京が採用した隋唐長安城をモデルとする北闕型都城は北を上位とする礼制機能をもった都市である。これが大宰府にも採用されたのは、都市の礼制機能を活かすべき職掌を大宰府には課せられたことを示している。その内容はいくつか推測されるが、端的には大宰府の外交機能を果たすための場の創出にあったとみてよいだろう。これを強く印象づけることになったのが、古代宮都同様に朱雀大路沿いに置かれた客館跡の発見である。



(4)客館跡の概要

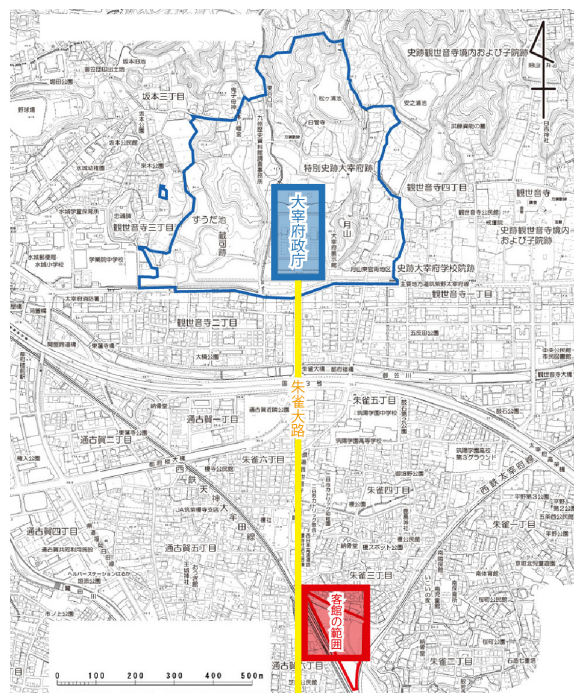
客館跡が発見されたのは、西鉄二日市駅北側の操車場跡地である。一帯では約1万数千㎡に及ぶ広範囲で埋蔵文化財発掘調査が実施され、掘立柱建物・井戸・土坑・畑・柵・溝・小穴・瓦窯・土取り跡などが検出された。条坊区画も明確に出現し、一区画90m四方とする条坊復元案にほぼ合致することが明らかとなった。条坊道路の改廃や土地利用変遷の情報についての知見が増えるとともに、左郭15条2坊において7世紀末に遡る条坊道路側溝・条坊内区画溝が確認され、条坊の成立を窺う重要情報を得ることができた。

ここに展開する8世紀第2四半期から9世紀前半にかけての施設が、客館である。朱雀大路の東に隣接する左郭14・15条1・2坊の4坪を占有したとみられ（南北約170m、東西約150m）、西は朱雀大路に、東は般若寺から延びる丘陵で区切られており、南は塀が設けられた痕跡がある。北は未調査だが、おそらく四周は遮蔽されていたのだろう。その南半東側（左郭15条2坊）には大型掘立柱南北棟2棟が南北に並ぶ。北棟は身舎16×3間で西側に2間庇がつく（29.5×8.8m、約260㎡）、南棟は身舎が11×3間で同じく西側に2間庇がつく（23.6×8.6m、約200㎡）。

この2棟は条坊内最大の建物で、政庁脇殿に類する配置・規模を有している。この西側は広い庭となっているが、さらに西側の朱雀大路との間に建物が展開する可能性はある。大型建物群の東側には3×5間掘立柱東西棟2棟・倉庫等が配され、客館管理の施設と想定している。

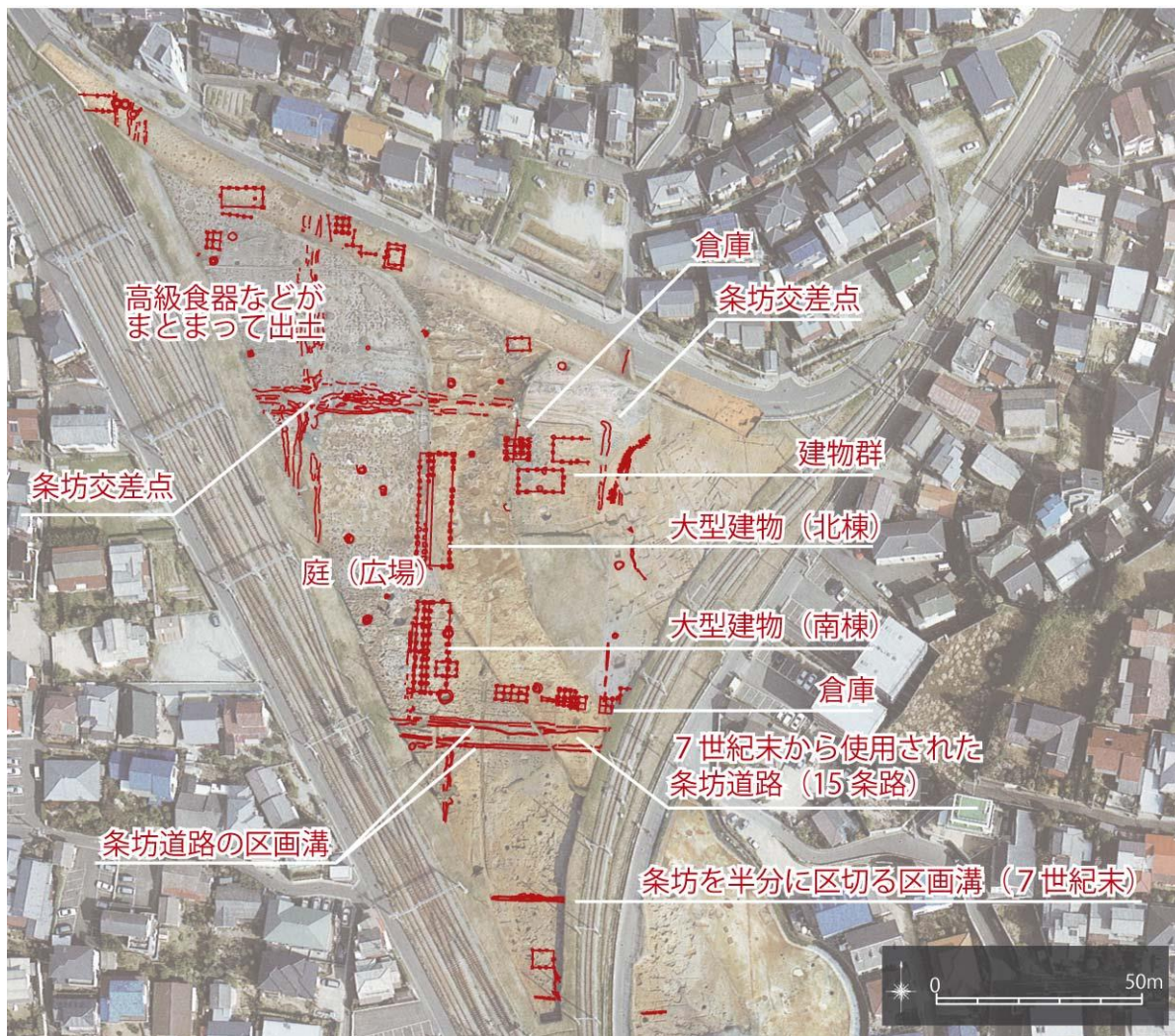
この一帯から、唐の白磁・青磁、新羅の佐波理・新羅土器、日本の奈良三彩、漆器などの国際色豊かな高級食器・容器が出土した。8世紀後半に唐ではじまった喫茶文化受容をうかがう、越州窯系青磁の茶碗・茶托なども出土している。この前後の時期は畑地などの土地利用もあってこうした高級品使用を要する要素が認められないため、これらは客館の時期に使用されたことを示している。高級食器・容器がとくに集中出土した敷地北西（左郭14条1坊）については、条坊内でも事例の少ない当該期の井戸が数基まとまっており、給食・給仕に関する厨エリアと想定される。「仕丁」（里毎に2人ずつ選ばれ、3年間雑役に従事）と記した木簡や、その出役日数を記した歴名木簡なども、ここから出土している。

なお、類例として多賀城市の市川橋遺跡の事例が挙げられる。多賀城下にあるこの遺跡では、中央南北大路沿いの東西に南北棟が並ぶエリアがあり、その東側東端には11×2間（33×6m）の城下最大の建物が南北に2棟並んでいる。出土品には特筆すべきものはみられないため施設の性格は定まっておらず、倉庫や市、また南北大路周辺で出土した文字資料から馬にかかわる施設



大宰府政庁と客館の位置関係

と推測される程度であった。多賀城下では中央赴任官が住む館が数例見つかっているが、それとも異なるとして館との想定もなされていない。ただこの遺跡は、都市内の位置や建物の大きさ・配置のあり方が本史跡と共通しており、本史跡例を踏まえ蝦夷饗応の客館との想定を支持する意見も出ている（井上信正 2010、鈴木琢郎 2013）。



航空写真と遺構の重ね図



客館跡復元イメージ